

『交通難民2』

\* \* \*

噺家 「(若者の声色で)「おいおい、ばあさん、そこに良いのがあるじゃねえか、ええ? それ、その大鉢に盛ってあるのタニシだろお、それちょいと小鉢にくんねえな」(おばあさんの声色で)「……これはタニシでなくて、焼き豆腐の炊いたんだあ」(若者)「豆腐う? 豆腐つつたらおめえ、四角いじゃねえか。なんでそんな茶色くぼろっぼろになんてんだよ、タニシだろお?」(おばあさん)「何度も何度も煮直して、角が取れて、こんなになったんだよお」(若者)「(あきれて)またずいぶん煮直したもんだねえ。……ばあさんよお、それってえとその豆腐、けっこう古いんじゃねえかい?」(おばあさん)「古いってことはあんめえ。これは村の八幡様のご祭礼のときのお煮しめの残りだもの」(若者)「(からかうように)なんだい、そのご祭礼ってのはよ、去年あたりにあったのかい?」(おばあさん)「去年てことはねえよお」(若者)「(笑って)まあ、そうだろうなあ」(おばあさん)「おととしだあ」(若者)「もっと古かったよおい!」……(地声で)二人旅ににんたびというお話でございました(正座のまま一礼)」

(立ちあがり、上手から下がる)

(高座の前を通過して舞台端へ)

青年 (舞台端に立っている)  
(噺家が通りかかるのを見つける)

青年 「あつ、……あの、」

噺家 「はい」

青年 「え、ええと、あの、どうして、……じゃなくて、あの、いつもお話、聞かせてもらっています」

噺家 「……ああ、ああ、そうか、……はい、存じてますよ、あなたのこと」

青年 「え!？」

噺家 「客席から高座が見えるのと同じくらい、高座から客席というのも見えているものなんです。……あなた、私の独演会によくいらしてますね。前は、んー、仙台だったかな」

青年 「はい! いちおう、その、……追っかけのつもりで、行ける限り行かせてもらってます」

噺家 「方々でやるのに、ありがたいことです」

青年 「いえ、そんな……」  
噺家 「ま、でも、今の時代、飛行機でビューン、ですかね」  
青年 「はあ」  
噺家 「ここでの話も、聞いていかれるんで？」  
青年 「え？ ……いえ、実は、間に合わなかったんです。チケット、買って会ったんです  
が……」  
噺家 「ん？ ……ははあ、さてはあなた、日付を間違えていらっしゃる」  
青年 「へ？」  
噺家 「会は今夜ですよ」  
青年 (驚いて声が出ない)  
噺家 「(あたりを見渡して) 船のエンジンがこんなに近くに聞けて、良い公園ですね」  
「(遠くを指差して) あすこでね、あたし今夜の練習をね、ちょこっとやっていた  
んですよ」

(歩き出す)

「では、今夜、お会いしましょう。失礼」

青年 (噺家の去った方を茫然と見ている)  
(しばらくして、その場にゆっくりと座り込む)  
(拳で地面をたたく)  
「なーがーさーきいーー！！！」

おじさん (登場)

(青年に歩み寄る)

「おい、あんた、落語は今日だったんだって？ 良かったじゃないか」

青年 (黙っている)  
(立ちあがる)  
(おじさんにチケットを渡す)  
「これ、あげます」

おじさん 「んん？」

青年 「会場は午後 6 時、開演は 6 時半、終演は、延びて 9 時だと思います」

おじさん 「おい、どうした？」

青年 「僕の代わりに笑ってきてください。それじゃ」  
(退場)

\*

\*

\*

青年 (立っている)

(時計を見る)

(前を見る)

スタッフ (登場)

「えー、博多行きのバスにご乗車のかた、チケットをご用意のうえ、3番乗り場にお並びください」

青年 (並ぶ)

(スタッフにチケットを見せる)

(バスに乗り込み、背負っていたリュックを網棚に載せ、着席する)

「……青春十八きっぷは残り一枚。長崎からじゃ、一日では電車で埼玉には着けない。金銭的に、夜行バスのうちでチケットを買えるのは、ここから大阪までがギリギリ。翌朝大阪から川口まで十八きっぷで電車移動。バスのチケットは購入済み。格安チケットだから、キャンセルはできない。ただし、長崎から大阪に直接行ける便はない。博多出発の便しかない」

「(憎々しそうに) どこへ行くにもいったん博多まで出るしかない。博多行きのバスは午後7時半が最終！」

(両手で顔を覆う)

「こんな町で落語会なんかやるなよ……」

スタッフ「博多行き、最終便、出発します」

青年 「(窓の外を見ながら) ……飛行機でビューン、か…… (長い溜息)」